片山敏彦著作集 2

ロマン・ロラン

ロマン・ロラン

片山敏彦著作集　第二巻

片山敏彦著作集 2
© 1971 Misuzu Shobo

1971年12月20日 第1刷発行

¥ 900.

著 者 片山敏彦（かたやま としひこ）

東京都文京区本郷3丁目17-15
発行者 北野民夫

東京都新宿区改代町24
印刷者 田中昭三

発行所 東京都文京区本郷3丁目17 郵便番号 113 株式会社 みすず書房
電話 814-0131(代)
振替東京 195132

（第3回配本） 理想社印刷・鈴木製本

目　次

限りなく人間的なるもの　3
生涯と作品
若き日　9
音楽という使者　22
マルヴィーダ・フォン・マイゼンブーク　24
生の道づれたち　37
『ジャン・クリストフ』　52
嵐の中の理性と心情　77
母の死と『クレランボー』　92
明るい本『コラ・ブルニヨン』　100
生ける《ユニテ》　110
輝く友情　118
ラーマクリシュナの体験について　123

ヴィヴェカーナンダの四つの道……132
ガンヂーと行為……141
ゲーテとホイットマン……148
インノセンス……155
女性の魂……157
ヴェズレーの丘のロラン……174
ベートーヴェン研究の完成……183
精神の遺言……192

*

『内面の旅路』について……202
ロマン・ロランと劇芸術……208

追憶と讃頌

ヴィラ・オルガの思い出……239
ロマン・ロランを偲ぶ……278
解説……清水茂……285

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongb

限りなく人間的なるもの

ロマン・ロランへの頌敬

ロマン・ロランの名は私には無限に人間的なものの生きた象徴として見える。七、八年このかた私はつねにこの象徴を生活から離さない。すでにこの名のひびきを思い浮かべるだけで鼓舞と光と慰めとを感じる。悲壮に、暖かく、厳粛に、晴れやかに、強く鋭く、限りなく甘美に、そしていつでも全人的にこの名はひびく――Romain Rolland という名は。

暖かく、そして偉大なロマン・ロラン！　私の内的日々のもっとも大きい意義を私は彼に負うている。彼の存在は私の内部に一つの燈明台のように照る。彼の魂の音楽は生そのものの声のように私の本質の深みへ流れ込む。その音楽は雄々しくて普遍的で母らしい。生き生きと人間的な諸力のこの広大な海の中に私が日々沐浴するのは、私が日々自己のうちに、自分自身の広まりと高まりとを感じたいためである。

彼の精神と実例とは、人類が今日もなお、同胞愛への信仰を保ちうるという確信をわれわれに与える泉である。同胞愛への要求の核心は人間の魂の持つ神秘な力に在る。いったい、魂とはなんであろうか？「魂（アーム）ですって……」と『魅せられている魂』の主人公アンネットが言う――「魂について話そうとするとおかしなことになります。人人は魂という言葉を使うとき、それをどんな意味で使うのでしょうか？……私は âme, soul, Seele, 魂という言葉に自分が持たせている意味をうまく言い現わすことができません。しかし、私が魂という語で言いたいそのものは

実在しています。ロジェー、なぜならそのものが在るので私も在るのです。それはほんとうに真実なものであり、本質の究極の深みです……」

ロマン・ロランは若い日本の魂の本質的なものを理解し、知る。真に生命的な日本は、政略的日本・軍事的日本ではない。それは内面的・内生的な日本である。内生的で同時に普遍性のある日本がめざめなければならず、それは目ざめかけている。もっとも自由な意味で深く宗教的であるとともにまことに大きな「自由精神」であるロランは、若き日本に道を示す偉大な友であるであろう。われわれの未来の子らが懐疑もしくは試煉の立場に陥るとき、その子らの間にロランの精神の種が成長し、ますます花をひらき実を結ぶことを、またつねにロランの実例と言葉とが、彼らに光と信念とを与えることを私は心から望む。彼はじっさい――シラーの『ドン・カルロス』の言葉を借りれば――「来るべき未来の子らの同時代人」であり、真の先駆者である。

未来の中により大きい真が生きうる場所を創造するために彼は真実ならぬいっさいと闘う。彼の存在の根拠であるところの真面目さ、人間的に不覇独立なまじめさが彼をみちびいてかずかずの苦がい戦いを戦わせつつ気高い「美」にまで到達せしめる、――その純粋な神々しい眺めをもはや地上のどんなものも妨げないような「美」にまで！　倉田百三は私への手紙に書いた――「ロランの魂は翼を羽ばたいてますます星空に近づくかのようです。」ロマン・ロランの一生は、「高貴な理想主義者」マルヴィーダ・フォン・マイゼンブークが心から愛していた言葉、ゲーテの美しい言葉の具現である――

「まじめさを、聖なるまじめさを、つねに身につけて行け。ただそれのみが、生を永遠なものにするのだから。」

自己自身に対する真実、それが彼の唯一の掟である。そしてこの「自我」は、包摂的な諸体験の、内部の大海を持っている。彼は、すべてのものを真に生かしめる活動を具現する。彼の仕事の中にわれわれは、われわれ自身が体験する悩みや悦びや疑いや失意や恍惚や夢や、その他多くの人間らしい諸力が生きているのを見る。しかし彼の

理性は彼に、嵐の中でもつねに囚われることなき精神をもって生き抜く力を与える。彼の理性は、人生の劇を――愛と憎悪の交互作用である人生の劇を、曇りなくイリュージョンなき眼ざしをもって見渡し洞察する。そして彼の心情はエンペドクレスとともにつねに「愛にのみ味方する。」それゆえに彼は言った――「真の唯一のヒロイズムとは、人生を人生の真景のままごまかさずに観てしかもそれを愛することだ。虚偽の英雄主義は怯懦の一種である」と。

彼の意志は生のより偉大なものの方へ彼をますます前進させる。そして彼の心情――その浄らかな白熱が彼の存在を円光のように冠づける無比の心情が彼に一つの高所を与え、この高所を、神的調和と永遠性とへの予感的信仰が支配するのである。それにしても、彼の全生涯の旅路の忠実な道づれは、あの無比な公明正大性である。

「今や何が起ころうとも、そこに確固たる大地があり、上に光明のあることは確かだ。」

私の母が一九二四年の春亡くなったとき私は悲しかった。ロマン・ロランの文芸作品の中に私は慰めを求めた。私は『聖王ルイ』や『ジャン・クリストフ』や『クレランボー』を読んだ。友愛の慰藉の音楽がいつでもそれらのページの中にあった。聖ルイ、クリストフ、オリヴィエ、アントワネット、クレランボー、そしてフロマン、これら作中の人たちが私の喪しみの伴侶であった。そしてこれらの人物たちの背後には、偉大な友の渝らぬ愛の眼ざしと精緻に優しい微笑とが感じられた。

フランツ・ヴェルフェルは――「普遍的なすべてのものは母らしい」と書いたが、もっとも雄々しい精神の人ロランの作品にはつねにまたそういう「母らしく普遍的なもの」がある。ゲーテが「永遠に女性的なるもの」と言ったものもそういうものではないであろうか。そういうものは現実の女性において見られる以上に、すぐれて雄々しい精神の男性の仕事に、きわめて美しく現われることがときどきある。ロマン・ロランはわれわれにとって時間・空間の限界の克服者である。われわれ東方人に、彼はまことの西欧を、われわれの兄弟として愛し讃嘆することを

教えた。人は今や「ロマン・ロランの西欧」という言葉を、歓ばしい具体的な場所のように感じる。大戦中、彼の祖国の偏狭な愛国主義者たちはロランに非フランス的フランス人という貼札をつけようとしたが、奇妙なことに、ロランはその全人類的な偉大さによってわれわれに、もっともノーブルなフランスを啓示してくれるので、われわれはロランの祖国としてのフランスをしぜんいっそうふかく理解し愛するように事実上なったのである！

一九二六年一月二十九日はロランの六十歳誕辰の日であり、われわれの慶賀の日である。この日のために心からの感謝と極東からのご挨拶との花環をわれわれは捧げる——人間性の偉大な使徒に。その内的太陽が神的人間的な愛の太陽であるところの彼の善き永き生涯の未来の日々に祝福あれ！

付記　この文章はロラン六十歳誕辰を祝うためスイスで出版された『ロマン・ロランの友らの書』(Liber amicorum Romain Rolland) (1926) にドイツ文で寄稿したものの日本語訳であるが、いくらか書き添えた部分がある。

同書の編纂代表者はゴルキー (Gorki) ジョルジュ・デュアメル (Georges Duhamel) シュテファン・ツヴァイク (Stefan Zweig) の三人であった。

生涯と作品

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongb

若き日

ロマン・ロランは一八六六年一月二十九日に、フランスの中部ブルゴーニュ地方にある小さな町クラムシーに生まれた。数代フランス以外の血を混えない家系であり、父はクラムシーの公証人（ノテール）であった。母は敬虔なカトリック教徒であり、ロランは幼少の時から母に音楽への愛をめざまされるとともにまた、宗教感情の中にある「永遠なものの味」を教えられた。これはロマン・ロランの生涯のもっとも深い基礎となった。しかしまた、父方の先祖の中にはフランス革命的伝統の啓蒙主義の精神があった。二つの精神はロランの生涯を通じて生きている。

十五歳の頃彼は宗教的懐疑の危機を通過した。それは、この一人息子の教育のために彼の両親が住みなれた静穏な故郷を引き払ってパリに移り、リュクサンブール公園に近い寓居からロランをルイ・ル・グラン中学校に通わせた頃である。ルイ・ル・グランの学校時代にはポール・クローデルとアンドレ・シュアレスとが彼の学友であった。この三人の少年は後にフランスの文学精神にそれぞれ相異なる大きな窓を押しひらくにいたったのであるが、当時この三人の少年を結びつけた力は、音楽殊にリヒャルト・ヴァーグナーへの愛とシェイクスピアの戯曲への愛とであった。シェイクスピアの作品はすでにクラムシーの故郷でロマン・ロランの内心を養っていた。私は一九三〇年の夏、ロラン自身から次の言葉を聴いた。――「子供の頃私には急に、生きることは大きな束縛の中にいることだと感じられたことがある。後にハムレットを読んだら、その実感が見事に芸術化されているので、わが意を得た気

がした。」

一八八四年にはじめてスピノザの『倫理学』を読んで、それを自分自身の眼と心とをもって魂の光とし、精神の養分としたことは、彼にとっては一つの救いであった。当時のフランスの精神的風潮は普仏戦争の憂鬱な影の中にあって、古い世代は懐疑主義と無気力な感覚主義とにその日を送っており、科学は十九世紀的唯物論の圧力の下にあり、文学はそれらの風潮を反映して、逸楽的で無信仰的であった。ゾラやフローベルの偉大さの中に、ロランは「絶望せる理想主義」の、その絶望的苦悩の意味と重さとを感じてはいたが、若い世代はみずからの形而上論を探求しないわけにはゆかなかった。それゆえに、ロランにとってはスピノザが、彼に形而上的拠りどころを示す電光であったのである。

「……十七歳と十八歳とは、生涯の悲劇的な二年間だ。一人の不安定な青年の肉体と家庭生活とをしか見ない人の眼には、とるに足りない年齢とも見えるだろうが。しかしこの二年間は、致命的な絶望の貪婪な怪物どもを内に隠していた。あの頃、まさにあの頃、私は虚無の底に触れたのだ。（中略）精神の転身がおこっていた。それは苦しい強力な転身であった。」（ロラン『スピノザの閃光』）

ロランはその時期を深い愛惜とユーモアとをもって追想している。彼は「めくら滅法に」哲学の世界を手探りした。「顔も色も匂いもない言葉、手でもさわれず口でも嚙めず、官能の愛撫をも傷づけをも冷然と撥ねつける、数学や形而上学の機械語――頭脳によって作られた天才の武器の前に、私はあっけにとられ敵意を抱いて佇立した。」これは、サン・ルイ中学校で哲学の講義を聴いた最初の頃の気もちを言っているのであるが、その後約一年経ってロランは哲学のクラスの首席になり、当時の先生は彼の論文を生徒らの前で読み上げた。どんな論文であったかといえば、ロランは、その論文の中で哲学者マールブランシュを彼の犬と対話させたのだった。彼は言っている。――「私は《無形者》を擬人化しながら、《無形者》の世界へはいったわけだ。しかし最大の哲学者だって、やはりそ

うしていないと言えるのか？」

すでにソクラテス前の哲人たちが本能的にロランを魅惑していた。この本能とはなんであるか？　近代の西欧においてヘルダーリーンにもニーチェにもこの本能が働いたことをわれわれは観る。この本能、この直観力を中心にしてロマン・ロランとニーチェとを比較してみる仕事は、今日の西欧文化の興味ある一契機を吟味することにもなりはしないかと思う。ニーチェは『遺稿』の中で言っている。

「あらゆる哲学体系は克服せられた。ギリシャ人らは従前に増して大きく輝く。とくにソクラテス以前のギリシャ人らが。」

「ギリシャの哲学者のような畏敬（エールフルヒト）の念を喚起する人物を、ほかに私は知らない。」

「偉大なギリシャ人らの知識が私を教育した。ヘラクレイトス、エンペドクレスらは近代の哲学者らよりもいっそう尊敬に値する、彼らの方がいっそう全的だから。」

「真の哲学者とは異常な何ものかを実際体験した人間のことだ。」

「ヘラクレイトスとエンペドクレスの考え方は再び復活した。われわれは精神的なことがらに関してさえ、ただ成生（ヴェルデン）を信じる……」

ニーチェのこんな言葉を私がここへ置くことは、見当はずれだろうか？　どうもそうは思えない。ニーチェとロランとの気質や観念の相違を超えて、何か或る本源的使命の一致のようなものがある気がする。「観察できる立場（ベンヤウリッヒカイト）を客観的立場だとし、それをすでに最高の立場だと思っているような認識は十分でない」というニーチェは、哲学認識の塀の上によじ登って、何か遠くを見ているのではないか？　ロランは本能にみちびかれてスピノザへ行った。彼はスピノザの中に未知の自分を見いだした。

「最大の書というものは、その報道するところのものが紙の円筒の上の電信記号のように頭脳の上にだけ印刻

されるものではなく、その生きた衝動(ショウドウ)が、他の多くの生命を呼びさまし、次から次へ火花を伝えるようなものである。」

「《確固たる永遠の諸事物》は真実在的である。それらがもっとも真実在的である。そして真実在的なものは《個性的》である。《確固たる永遠の諸事物》はそれぞれ《特性的》である。抽象ではなく、本体であり、実在である。いっさいが実在である。……唯一無限の実在、何一つその外にはない……」(ロラン『スピノザの閃光』)

若いゲーテを酔わしたスピノザの神が、また若いロランをとらえた。自己の内的本性の広大さと、個的存在の牢獄との間に感じられる切ない矛盾への一つの解答を、ロランはそこに見いだしたと思った。創造する自然と創造された自然とは、同一者である。ベートーヴェンの音楽からも、シラーの『歓喜への頌歌』からのそれに似た響きが聴こえる。そこにはいっさいを包む大海の波の音が鳴っている。

ロランはパリの師範(エコール・ノルマル)大学の三年間の学生時代に、フランスの古典的教養と仕事の方法とを身につけた。歴史学の専攻を志して、人類の精神が歴史の中に消長する姿を見、個々人と国と民族と人類との発展関係を眺め、かつまた、その関係の認識に即して、人類の未来の道を予感することを仕事とした。一面では天性の芸術家であった彼を、当時仏訳されたトルストイの作品が深くとらえた。ここでもまた、芸術家トルストイの生命に対する全的な力が彼を打った。感覚とともに良心が、信仰への探求とともに理性の力がそこにあった。『戦争と平和』は近代のイリアッドのように豊富で強くて、人生の生きた明暗を持っていると思われた。自然の輝きがまったく皮膚に触れるように生き生きと表現されており、人間的な心の動きの微風のような陰翳までが見事に描かれているとともに、雄々しい精神の曇りない視力が強靱な構成を保っている。そして、フランス自然主義の作品に見いだしえない暖か味が作の底から湧いてくる。これこそ真に叙事詩的天才の作品だ、とロランは感じた。しかしトルストイはまた、道徳家

であった。トルストイはベートーヴェンをデカダンだと言い、シェイクスピアを低級な作家だと言い出した。これは若いロランにとって、つらい批評だったに相違ない。――もっとも尊敬する人が、他のもっとも尊敬する人を罵倒するのを聴くことは！　しかしそれよりもロランにとっての問題は、西欧の良心であるようなトルストイが、そして最大の芸術家としてロランの尊敬したトルストイが、芸術創作の仕事そのものを悪徳であるかのように言い出したことであった。社会へ果たす勤労の義務と、まったく孤独の中で自己へ閉じこもってしなければならぬ芸術創作の仕事との矛盾、この悩みについて、ロランはついにパリの学生区から長文の手紙をロシアのトルストイへ書き送った。返事を期待できるとも思わなかったが、或る日、返事が来た。三十八ページの論文ほどな手紙であった。「親しい兄弟よ、私は眼に涙を溜めてお手紙を読みました……」と、トルストイはフランス語で書いていた。答えの要点は、人と人とを分裂させる芸術作品はわるい、芸術家は無私な動機から、自己の作意に責任と献身とを用意しつつ、人と人とを結び合わせ、理解させるために書くべきだというのであった。ロランは何よりも、トルストイが自分の――無名な一学生の悩みに懇切に答えてくれたことに感銘した。そしてこの感銘は、今度はロラン自身が他の人々に対して果たす行為を深く規定するようになった。将来ロランの書簡が発表されて、それが書簡文学としての稀有の現象を示す以上に、人々が彼の精神的助言者、または奉仕者としての姿におどろくとき、人々はまた、トルストイのことを連想するに相違ない。

二十三歳のとき、ロランはエコール・ノルマールを卒業して、歴史科の留学生としてローマへ行き、マルヴィーダ・フォン・マイゼンブークというドイツの老婦人を識り、影響を受けるところが少なくなかった。マルヴィーダはかつてヴァーグナーやニーチェの親友であった。彼女はもとドイツの貴族の出であったが、一八四八年の革命運動に加わった後、ドイツを出て、永らくロンドンで教師生活などをし、その時期にヴァーグナーやイタリーのマッチーニ等とつきあった。ひじょうに純粋な理想家で、ロランは彼女の中にほんとうのドイツ理想主義者の魂をはじ

めて目のあたりに見た。この経験は後に『クリストフ』の中の大学教授シュルツ老人の性格の中に生かされた。マルヴィーダに導かれて、ロランはゲーテやシラーの文学を知ったし、またヴァーグナーやニーチェについての追憶を聴かされて、十九世紀の西欧の最大な人々に直接触れているような気がするとともに、彼らが隠していたいろいろな深刻な悲劇をも知った。また、マルヴィーダの家で識り合った一人の若い女性に、『クリストフ』のグラチアのモデルとなった人がいたらしい。マルヴィーダはロランにとって「第二の母」であった。すでに七十歳を超えていたが、魂はローマの空のように澄んでおり、全西欧の知的活動に活潑な関心を持っていた。この人が『ジャン・クリストフ』の誕生に最初の刺激を与えたのである。ロランは昼間ヴァチカンの書庫で歴史文献の中で暮し、ほとんど毎夕マルヴィーダの家に行ってピアノをひいて聞かせた。ピアノはマルヴィーダがロランのために借りたものである。マルヴィーダの談話から、ヴァーグナーやニーチェの精神的存在はなお現存しているような気もちがロランはした。一時代前の人々の悲劇の意味がロランの心の底へ降りて行き、そこで彼自身の夢想と溶け合った。

マルヴィーダという女性は、その存在の接触によって照らす力というようなものを持っていた人らしい。ニーチェもそのことを言っている。ほんとうに善いドイツ人の持つ深切さに充ちた人だったことは、後にロランが「モーツァルト論」（今日『昔日の音楽家』の中に収録されている）を書いて、パリでどの雑誌も発表しなかったとき、マルヴィーダが自分でドイツ語に訳してドイツでの発表機関を探しているときの手紙などを見ても人柄がわかる。しかしこの老婦人も、ロンドン時代には自殺まで考えたことがある。ロランは書いている——

「……或るとき私は自分の深く苦しんでいることをマルヴィーダに打ち明けた。ともすると熱情が、若い気狂いじみた心を淵の際まで駆りたてる危険な酔い心地を。〔ロランは、発作的な死への憧憬のことを言っているのだ。〕そのとき彼女は、悲しげな憐れむような重々しい微笑を見せた。そして私に言った。『この室を悲劇が一つならず出入りしました。この室に来たことのある人々のうちの四人は、後に自殺しました。』

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongb